

候に於いて必然の効果を収め得られるでせう。即ち皮膚が強堅になるから冬期火燧に入る様な情け心も出ず、随つて感冒にかゝる恐れがないから咳嗽の爲に呼吸器病も患ふこともない、胃は無暗に強くなつて消化の困難を訴へることがないばかりか、精神は爽快に頭腦は透明になるに連て記憶力は増進する、殊に青年の男女は兎角頭痛を覺え易いものであるがこれも亦海水浴の爲に全治して跡を斷つことになりませう。かくても猶諸君はこの好期を逸して空しく一室中に座臥せらるゝお心算でせうか、何うです。(大阪毎日新聞所載
下クトル維方正清君講話)

貞一の日記(明治三十六年五月三十一日生男兒)

その母

六月十一日 昨夜少しく熱ある様、おもひし故、

計れば卅七度八分なりき。今朝は、少し快き様子なれど、例の山本醫師の許に行く、初は中々、いやがりて、醫師も、殆んど手の付け様もなき位なりしかども、時計を出して、見せられしより、好物の事とて頓に機嫌なをりて、大人らしく、すまして、胸腹など、丁寧なる診察をうく。

午前五時半起き午後七時眠る。晝寝二時半。

おもゆ、二回、乳、晝四回、夜一回。

六月十五日 毎日よろこびし、腰湯を。如何にしてか、今日はいやがり、たらひの中につちた、足ふみのばして、少しもかゝめず、強て座らせんとすれば泣き叫ぶ、種々すかして、そこくにつかひをはる。何か氣に入らぬ事あれば、必喰ひつくそれは大抵晴江さん(貞一の從姉)に對しての場合多し。午前六時起き、午後六時眠る、晝寝、一時間。

かもゆ 二回 乳、晝三回、夜一回

六月十七日 乳をのみながら、父上ちやうへに、爪つめをとりていたいく、少しも動かうごかず、中々大人なかなかおとなしく、終しままでとらせる、

父上ちやうへの書齋しよさいの、小き方ちいさほうのテーブルの下したに、はいこみその横木よこぎを、とらんと引張ひっぱる、

夕食後ゆふじご、父母ふぼに伴ともはれて、電車でんしゃを見みに行く、燈火とうか美うつくしき、電車でんしゃの、馳はせ來きたるを見みるや、大聲おほさわを出だし、かどり上ありてよろこぶ。

午前七時まへんしちじ卅分さんぷん起き、午後九時ごふんくじ眠ねる 晝寢ひるね四十分

かもゆ 二回 乳、晝三回、夜二回

六月十九日 母ははとばあやに、つれられ、石野俊夫いしのとしをさんの御家ごうちに遊あそびに行く、俊夫としをさんは、貞一まことよりは、百日程ひゃくじつほど兄あにさんなり、中々愛嬌なかなかあいせう者もので、愛想あいせよく、れもちやなど貸かして下くださる。どうしたのか、しま

ひには、一ひとのかもちやをとりわひして泣なき出す、俊としチャンの父様ちやうさんに抱だかれて、機嫌きげんなをる、他の男よそのおとこの人に、機嫌きげんよく抱だかれしは、今日けふ始はじめてなり、しかも初對面しよたいめんの方かたに、

午前八時まへんはちじ起き、午後九時ごふんくじ眠ねる 晝寢ひるね 三時半さんじはん

かもゆ 二回 乳五回、夜一回

七月三日 父母ふぼに伴ともはれ、上野公園うのこうえんに遊あそび、櫻木町さくらぎちやうの鈴木氏すずきしを訪とふ、今年ことねん九歳くさいになる、一郎いちろうさんと、四歳よんさいになるいね子こさんと遊あそぶ、御庭ごにわの芝生しばふの上うへへはだして立たた、してやれば、氣味きみ悪わるるそうに、足あしを上げる、初めはつめの中ちゆうは、はづかしがつて、母ははには、かり、よりか、つて居まりしも、暫時せんじの内うちには、いね子こさんの、帯おびをぐいとひつぼつて、よろくと倒たはれさうにしたり、また顔かほをつかみに、行ゆかうとしたり、すいぶん、いたづらをして母ははを困こまらす、

午前六時半起き、午後九時眠る、晝寝 一時間

ふもゆ二回 乳晝三回 夜二回

七月五日 今日より、朝起きて、母が學校へ行く

までの中に、飲ます乳を廢す、少しく機嫌悪かり

しも、母學校へ出し後は、大人しかりしと、

かゆ一回 ふもゆ二回 乳晝一回 夜一回

午前五時半起き、七時半眠る 晝寝二時間

七月八日 此の二三日 オンモといへば 直ちに

背中へ倚りかゝり、カー〜といへば、空中を指

す

どんなに、機嫌悪しき時でも、ビヤノを、弄ばせ

ると、直になをる、左の手は低き方なり、右の手

は、高き方より順に、一つづゝ鳴して、終には兩

手にて、ジャンといはせるのが、おさまりなり、

午前四時半起き、午後七時眠る 晝寝二時間

かゆ一回 ふもゆ二回 乳晝二回 夜一回

かゆには 鶏卵をませ ふもゆも一回は鶏卵一

回はかつをぶしの、スープをませる、

七月十日 今日始めて、平放しにて二足三足歩

誕生後四十日目なり、此子は一體這ふ事も遅くて

「這はないですぐ歩き始めるのでせう」など言ひ

合ひ居る中に、いつか這ひ出し、夫より大方百日

目の今日、始めて歩み出せるなり。

七月十二日 始めて有意的に、玩具の笛をとりて

吹きては、人の顔を見て、得意らしく笑ふ

午前五時半起き、午後七時眠る

かゆ一回 ふもゆ二回 乳晝一回 夜二回

七月十四日 ばあやにおはれ、鶏卵を買ひに行き

しに、店先にて鶏卵を見つけるや否、すぐにくれ

と手を出して大さわぎするを、店の内儀竹の小さ

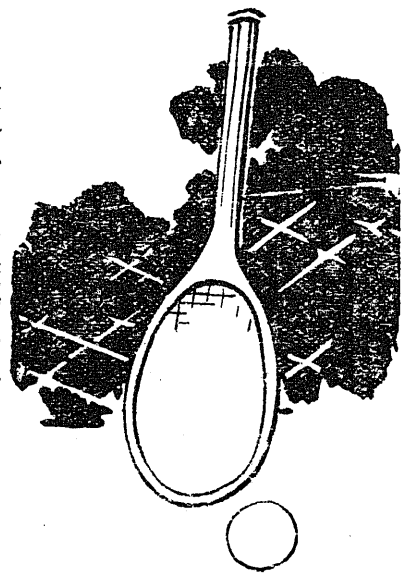
輪を、おもちゃにとてくれしにて、漸くまごら
れたり

午前六時半起き、午後七時半眠る

かゆ一回 おもゆ三回 乳晝 二回 夜一回

Let a child have its will and it will
not cry.

子供をして意の儘にせしめよ、然らば子供は泣かざる
べし。



女子高等師範學校附屬

幼稚園分室

一、保育の方法及成績の概要

(之は明治三十六年四月より三十七年三月に至
る一年間の記事なり、以下之に倣ふ)

幼兒に對し、一個人としては心身健全活潑にして
從順 正直 誠實 熱心 忍耐 勤勉 親切 獨立等の意育情
育に力めて之が實行を期し、下等社會に育つが爲